

田辺元のヴァレリー論における詩作の偶然性と必然性について

—— 恩寵を手掛かりに ——

藤 貫 裕*

はじめに

日本におけるポール・ヴァレリー（Paul Valéry, 1871-1945）の受容という観点からみたとき、田辺元（1885-1962）の受容は際立っている。というのも、彼は京都学派でヴァレリーを論じた哲学者の中でも、『ヴァレリーの芸術哲学』（1951）というモノグラフまで著した唯一の存在であるからだ¹⁾。もっとも、田辺本人としては「科学哲学から宗教哲学への過渡として飽くまで習作のつもり」だったようだが、その後、日本哲学史研究者のみならずフランス文学研究者の関心も集め、特にここ10年程で先行研究の蓄積も急速に進んでいる²⁾。しかし、京都学派のヴァレリー受容、特にその創作論の受容という観点からみた時、これまでの研究では未着手の重要な論点が浮かび上がってくる。それは、『ヴァレリーの芸術哲学』の第六章における「詩学講義 第一講 Première leçon du cours de poétique」（1938）解釈、具体的には、詩作における詩人の「待つ attendre」という偶然と必然とが絡み合う態度について論じた箇所である。後論を先取りしていえば、田辺はそこで独自の宗教哲学である「懺悔道としての哲学」に基づき「恩寵」という偶然的契機を読み込んだため、ヴァレリー本人の思想と田辺の解釈との間に決定的なずれが生じるとともに、そのずれが田辺の最終的なヴァレリー評価にも影響を与えている。本稿の課題はそうしたずれの内実とその拠って来るところとを見定めることである。それは田辺研究における研究の欠を補うのみならず、京都学派によるヴァレリーの創作論受容における一つの傾向を浮かび上がらせるものともなるであろう。本論の流れは以下の通りである。まず第一節で上述の論点に関する田辺の解釈を確認した上で、第二節ではそうした解釈が成立した要因を、田辺の『懺悔道としての哲学』（1946）における「懺悔」を巡る論述の中に見出

*ふじぬき ゆう 京都大学大学院文学研究科 研究員

だす。そして第三節で、田辺の解釈とヴァレリー本人の思想について、特に後者については、「詩学講義 第一講」のみならず関連する著作の論述も踏まえて内容を補った上で比較することで、田辺のヴァレリー受容の特徴を浮彫りにする。

一. 『ヴァレリーの芸術哲学』における詩作の偶然と必然——信望する詩人

それでは早速、田辺による「詩学講義 第一講」の読解の中でも、「待つ」という詩人の態度を巡る論述に焦点を絞った上で、その内容を整理する所から始めよう³⁾。田辺の読み筋を予め簡潔にまとめると、以下の通りである。田辺は詩人の待つという態度の内実を、「限定できないもの l'indéfinissable」を巡るヴァレリーの論述を手掛かりに理解する。その際、前述した懺悔道としての哲学に基づく読み込みも同時に行うことで、最終的には、田辺哲学に肉薄しながら後一步届かなかったという評価をヴァレリーに下す。

さて、田辺によれば「限定できないもの」を巡る思索は、ヴァレリーの「芸術制作的行為自覚の核心」に位置する(13/6)。それは田辺の中で「不確定帯」「不確定性無秩序」「不確定的雰囲気」といった具合に様々な仕方で呼ばれるが、とりわけ重要なのが「虚無」という呼称である。田辺によれば、限定できないものは「一定の秩序に排列することのできぬ、矛盾的に交互否定し合う契機の反対抗争に外ならないから、それはまさに虚無といわれるべきものである」(13/145)。ここで言われる「矛盾的に交互否定し合う契機の反対抗争」として念頭におかれているのは、例えば「作詩における意味と音調、語法と韻律の如き相互否定的」「対立」、あるいは、「作家の同一人格内」における「制作者」と「批評家」の「対立的動的統一」といった「二律背反」である(13/104, 157)。そして詩人は、詩作行為を通じて「この不確定的雰囲気を破って突発し、これを解消せしめて、作品の確定に達する」(13/145)。

ここで注意しなければならないのは、田辺における虚無と行為の関係である。田辺がヴァレリーに見出すのは、行為による虚無の克服といった単純な事態ではない。田辺によれば、ヴァレリーが語っているのは、詩作において詩人の精神が「本性上有限確定的なる表現に還元すること不可能なる状態、すなわち不確定的無秩序に、進んでみずから適応することにより、作品の決定を達成する」ということである(13/161)。「不確定的無秩序」としての虚無に詩人が「進んでみずから適応する」とは、また、むしろそのことによって「作品の決定を達成する」とは如何なる事態なのか。この逆説的事態に関する田辺の説明——それは田辺の主張が詰まった少し長いものであるが——をさらに追ってみよう。

しかるに芸術制作的行為に於ては、今見たような転換の逆説性がそれを無に開放すると同時に、無即愛の恩寵に復活せしめるのである。それはヴァレリーのいわゆる《時々》に恵

まれる恩寵の瞬間に属するものであるから、個人精神が自由にこれを自己に均衡（マッチ）せしめることはできない。飽くまで無即愛の不確定性にゆだねられるのでなければならぬ。しかしこの不均衡的偶然性不確定性は、その実現の条件として、個人精神が無の立場に開放せられることを必要とする。たとい、その無が絶対無即愛として積極的に肯定に転ずることは、転換の自由偶然性に委ねられる外ないとしても、その消極的否定的条件として虚無の媒介がなければならぬことは、無の構造的必然に属する。そのためには、精神は自己を限定する客観的存在の規定を追究して、二律背反の矛盾的虚無にまで徹底することを要するのである（13/156）。

詩人は詩作の中で、自らの「精神」を「二律背反の矛盾的虚無にまで徹底」しそれを「無の立場に開放」する。すると「ヴァレリーのいわゆる《時々》に恵まれる恩寵の瞬間」、田辺哲学の語彙を用いれば、「個人精神が自由にこれを自己に均衡（マッチ）せしめること」のできない「不確定性」を有する「無即愛の恩寵」によって、「その無が絶対無即愛として積極的に肯定に転ずる」ことがあるのだという。「無即愛」や「絶対無」といった懺悔道としての哲学の語彙を用いた説明によって、理解がより困難になったようにも思える。だがここでは取り急ぎ、恩寵という論点が付け加えられていること、そして詩作の単なる「消極的否定的条件」に思える「虚無」に、詩人の立場の変更を促すことで「恩寵」を「媒介」という積極的役割が与えられていることが確認できればよい。さらに田辺は、引用箇所が続く論述の中で、こうした「天才的創造の超意識的恩寵降下」に際して「職人的技巧習練の有すべき媒介性」も語る。「恩寵降下は絶対無即愛に委ねられる限り、ただ信望せられるのみで、待望することをも容さない」が、「その媒介としての習練努力は飽くまで自己に属する」。要するに詩人は「人事を尽くして天命を待つ」べきなのだ（13/156-157）。

かくして田辺がヴァレリーの「詩学講義 第一講」から抽出したのは、必然としての人事（習練努力）を尽くしながらも困難（二律背反的虚無）に直面して「無の立場」から偶然としての天命（恩寵）を「信望」する、という詩人像であった。しかし、厳密に言えば、田辺にとってそれはヴァレリーが「描くべき」であった詩人像である。実際のヴァレリー（の論述）は「宗教性」を欠いていた、とりわけ「懺悔の媒介をなす」「慈悲恩寵を信証することなき諦忍希望を要するにとどま」ったがために、「無即愛の弁証法に達するに至らなかった」（13/104）。要するに、田辺が懺悔道としての哲学で提唱する懺悔の在り方を、ヴァレリーは十分な仕方では論じられていないというのである。田辺の哲学を知るよしもなく、そもそも宗教を論じる意図もなかったであろうヴァレリーに、こうした物言いで批判を加えることの是非は、ここではひとまず措く。少なくともここまでの検討で明らかになったのは、田辺のヴァレリー理解と評価をさらに理解するには、彼の懺悔道としての哲学を参照する必要があるということだ。そこで

次節では田辺のヴァレリー論のさらなる理解に向けて、懺悔道としての哲学、とりわけその核心にある「懺悔」という概念の内容をみていくことにする。

二、懺悔道としての哲学における懺悔と恩寵 —— ヴァレリー受容の屈折点

田辺の「懺悔」を理解する上でもっとも注意しなければならないのは、田辺によるその語への「意味充填」である⁴⁾。田辺は、懺悔の語源である *μετάνοια* (田辺訳では「後思」) が意味する内面的な在り方、具体的には、過去の自らの過ちに対する自責や後悔の念という意味をおさえた上で、その意味を積極的に拡張している。具体的には、懺悔は「行」という宗教的实践であり、そこでは自己(特に理性的自己)によって過ちを是正することの限界の自覚、そしてその自覚に基づく自己抛棄が伴わなければならない、とする。さらに、後者は前者の徹底を通じたものでなければならない、つまり、自己の無力を突き詰めれば自力の自己抛棄(例えば自殺)すら許されず、他者に自己を完全に委ねるという「随順」という在り方をとらなければならない、とされる。田辺によれば、こうした自己の無力の徹底的な自覚に基づく随順的な自己抛棄においてこそ、「絶対無」あるいは「無即愛」としての絶対者の「絶対転換」による自己の「死復活」が可能になるという(9/19-21)。

ここで絶対者が絶対無と呼ばれているのは、それが「肯定と否定との対立を超え」ているかつ自己以外の媒介を経由してのみ存在しうる「絶対媒介」であるから、即ち、それが相对(自己)の自己否定(自己抛棄)を否定する(肯定に転ずる)働きであるとともに、絶対として独立自存することなくそうした相对への働きかけとしてのみ存立しうる、と解されるからである(9/22-24)⁵⁾。また、それが無即愛と呼ばれるのは、そうした絶対無としての絶対者の働きがキリスト教で言われる「愛」の —— さらに付言すれば、浄土教で言われる「大悲」による —— 「救済」に通じるとされるからである(9/23)。なお、こうした懺悔は「有限不完全な」自己によって行じられるが故に一度の行為では完了し得ず、「不断に」行じ直されなければならない(9/5)。また、こうした懺悔においては「悔恨の苦痛」や「絶望の悲哀」と共に「肯定の歓喜」をも「享受」されるという。そして、その歓喜の情が絶対者への「感謝」と「他力への協力」としての「報恩」へとつながっていくとされる(9/22)。これが、田辺における「行」としての「懺悔」の概要である。

このように田辺の論じる懺悔は、非常に緻密かつ高度に思弁的な仕方でも説明された宗教的实践であった。次にみていきたいのは、こうした懺悔概念に基づく田辺のヴァレリー読解である。田辺の読解を検討する中で理解に困難が生じたのは、詩作において二律背反的虚無という困難に直面した詩人が、むしろその虚無に「進んでみずから適応する」ことで「作品の決定を達成する」という、逆説的事態を論じた箇所である。そして田辺は、この逆説的事態を成立させる

のが、「無即愛」ないし「絶対無」としての「恩寵」であるとしていたのであった。こうした田辺の読解は、懺悔における「自己抛棄」という契機を踏まえれば、見通しよく理解できるようになると思われる。まず、詩人が虚無に適応するとは詩人の自己抛棄、具体的には、意味と音の調和を筆頭とする諸難問に直面した詩人が、自力での解決を諦めることだと理解できる。そしてそうした行為を経てこそ作品が決定できるというのは、自己抛棄をきっかけにそれを肯定に転ずる「無即愛」ないし「絶対無」の働きが可能になる、詩作で言えば、詩人が一旦諦めることで、時々ではあるものの恩寵に担われて問題が解決され、作品の完成に至るということだと考えられる。ここまでくれば、ヴァレリーは十分に懺悔を論じられていないというヴァレリー評価の内実も、より明確に理解できるようになる。田辺が最も不満を覚えたのは、ヴァレリーが「慈悲恩寵を信証することなき諦忍希望を要するにとどま」り、懺悔における「媒介」が上手く説明されていないという点であった。これも懺悔における自己抛棄という論点を踏まえれば、以下のように理解できよう。田辺の見るところ、「待つ」ことを巡るヴァレリーの論述では、自己抛棄という契機の媒介としての積極性が明確化されていない。言い換えれば、二律背反的虚無を前に恩寵を信望するとだけ述べるヴァレリーは、虚無を目の前にした詩人の諦めが恩寵への通路を開くという、自己抛棄の「転換」という積極的役割を捉えられていないのだ。

さて、ここまでの考察で「待つ」という詩人の在り方を巡る田辺のヴァレリー解釈の要旨は一通り確認された。しかし、実は、ここまでみてきた田辺の解釈全体を根底から揺るがすような事実が一つある。それは田辺の読解の核心にある「恩寵」という語も思想も、ヴァレリーの論述には一度も登場しないということである。それどころか、次節で確認するヴァレリーの「靈感 inspiration」理解から明らかなように、超意識的な創造作用に担われて傑作を成就するという詩作理解は、ヴァレリーのそれとは全く相容れないものなのだ。とはいえ、それは田辺がヴァレリーの論述を全く無視して論を進めたというわけでは勿論ない。確かにヴァレリーは、詩人は「詩的言語」における音と意味の調和という問題を「目隠しで」「時々」解くに解ぎず、そこに「諸瞬間や個々人の不確実さや不公平」があるのだと語っている（*E*, III, 972）。田辺はこの記述を踏まえて「ヴァレリーのいわゆる《時々》に恵まれる恩寵の瞬間」とまとめたのだと考えられる。しかし、ヴァレリー本人はそうした時々の解決をもたらす存在として「恩寵 *grâce*」も「靈感」も持ち出していないのだ。田辺もまた、この箇所を訳出するに際しては、恩寵という訳語を用いていない（13/137-138）⁶⁾。つまり、恩寵という語とそれに関する解釈内容は、田辺が解釈する段になって持ち込んだあるいは読み込んだ異物なのである。それではヴァレリー本人は、詩人が何をどのように待つと論じていたのか。いまやこの問いに答えることで、田辺とヴァレリーとの実質的な差異がより具体的な仕方で明確化されなければならない。

三. ヴァレリーにおける詩作の偶然と必然——待機する詩人

田辺との差異をはっきりさせる上でまずおさえなければならないのは、ヴァレリーの「靈感 inspiration」に関する見解である。例えば『詩と抽象的思考』(1939)では、靈感とは「積極的に言えば、読者が詩人にもたらす無償の属性である」とされる(Ⅴ, Ⅲ, 827)。そして、こうした主旨の内容は「詩学講義 第一講」でも論じられている。ヴァレリーによれば、読者は作品の「消費者 consommateur」であるとともに、「作品の価値の生産者 producteur de la valeur de l'ouvrage」、さらには「自らが賞讃するものを作り出した想像上の存在の価値の生産者 producteur de la valeur de l'être imaginaire qui a fait ce qu'il admire」でもあるという(Ⅴ, Ⅲ, 962)。特に後者の価値の生産について、ヴァレリーはさらに説明を加える。彼が注意を促すのは、ある作品が「多くの試み、反復、削除、選択を取り集めた」「長年の配慮の産物」であったとしても、そうした「作品の効果は数瞬の内に生じるだろう」ということだ。つまり読者は、「突然のこの知的労働の巨大な電荷による興奮に従う」ことで「ある超人的な力の印象」を得る。その結果、彼らは「何であれ何かを発するために必要な影響の他には何も生じさせずにこうした奇跡を創造できる、途方もない力を有するひとつの存在を想像するように仕向けられる」という(Ⅴ, Ⅲ, 961-962)。要するにヴァレリーによれば、傑作を成就せしめる靈感とは、読者の想像上の拵えに過ぎないのだ。

とはいえヴァレリーは、詩作が全て詩人の意のままあるいは努力次第であると考えているわけでは当然ない。ヴァレリーの詩作理解におけるこのあたりの機微が、詩人の「待つ」という姿勢を巡る考察には反映されている。そこでその内容をみていきたいのだが、本論点については既に別稿で論じたことがあるので、以下ではそこでの論述の要点を確認していく⁷⁾。

ヴァレリーによれば、詩人は詩作の端緒と過程において待つという態度を要求される。まず詩人は、「見出された」詩句なるものの到来を待ち受けなければならない。それは「夢にかなり類似した状態を通して」「詩人の心に浮かんでくる」詩句、あるいは詩の「形式」や内容に関する「幻視」である(C, IV, 162, 641)。これと意識的に「作られた」詩句という「二種類の詩句を組合せ調整」することで両者の「不均衡」を解消できたとき、作品が成立するとされる(C, IV, 884)。

ここで言われる見出された詩句は、一見ヴァレリーが否定しようとした靈感や田辺の恩寵にあたるようにも見える。しかし、あくまでこれは詩作のきっかけあるいは参照軸にすぎない。詩人には、見出された詩句にひけをとらない詩句を意識的に作り出し、首尾一貫した一つの作品の完成まで漕ぎつけるという課題が残されている。そしてそこでは、「自らの精神の体系における」「自由の度合いを引き下げる」までのことしかできず、「そうした制限下でも可能な変容や置換」については、「望むものが生じるのをただ待つ」しかない。(Ⅴ, Ⅲ, 968-969)。例え

ば、内容の大まかな方向性や採用する韻律形式が定まったとしても、そうした条件下で可能な語句や内容の組み合わせは、依然として無数にある。そこで詩人は、どれが最善の組み合わせかは不明なままに、その生起を信じて、候補となる語句を書き出しては比較検討するといった地味で根気のいる作業に従事するより他ない。これこそ、詩作の過程で詩人が強いられる待機の具体相である。さらに言えば、この待機は報われないこともしばしばである。詩人は待つのだとヴァレリーが述べる時念頭におかれていたのは、実のところこうした有様であったのだ。

こうしてみると田辺による恩寵の読み込みは、ヴァレリーの靈感理解に即していえば、生産者としての経験を持たない消費者（読者）による、作品を産み出した「想像上の存在の価値の生産」の模範的な事例といえるかもしれない。また、偶然と必然という論点を考慮すると、詩人が「待つ」ことの内実および偶然と必然の関係が、田辺とヴァレリーとでは、正反対と言える程異なっていることにも気づかされる。田辺の場合、「人事を尽くして天命を待つ」という表現から明らかなように、詩作は必然から偶然へという単線的な過程である。具体的には、詩人には人事という必然（習練努力）が前提として必要だが、それでも乗り越え難い困難（二律背反の矛盾的虚無）があるので、自力を諦め天命という偶然（無即愛の恩寵）を「信望」する、という流れになっている。それに対してヴァレリーの場合、田辺の表現をもじれば「天命を受けて人事を尽くしつつ待つ」とでもいえるような、偶然を起点にそれと必然とが絡み合うより複雑な過程が語られている。詩人は偶然（見出された詩句）——それは完成図はおろか、完成の保証もそこまでの道筋も十分には示してくれないのだが——を天命として引き受け、人事を尽くす（作られた詩句の推敲）によって作品の完成を目指す。しかし、そうした必然的な（意識的な）過程においても、適切な語句内容の時折の偶然的生起に賭けて、いつ報われるともしれぬ待機を強いられることになる。

さて、ここまで田辺とヴァレリーとの間に横たわる見解の差異を明らかにしてきたが、最後に懺悔道としての哲学をもう一度考慮して、両者が再び歩み寄る可能性も示しておきたい。前節で確認したように、田辺による批判の要諦は、ヴァレリーが詩作を懺悔として十分論じられていない点にあった。それはつまり、懺悔に不可欠な自己抛棄という契機とその積極性——詩作でいえば、二律背反的難問の解決の諦めが、恩寵に担われる機縁となり、傑作の成就が可能になること——が、適切に把握された上で明示的に論じられていないということであった。これまでみてきたように、こうした田辺の見立てがそもそも恩寵の読み込みによって可能になったからには、こうした解釈や評価自体筋違いであると一蹴してしまうことも出来よう。しかし、ここで一旦踏みとどまり、田辺における懺悔道としての哲学という理論とそのヴァレリー論への応用とを区別した上で、ヴァレリー本人の論述を見直してみよう。

ここで確認したいのは、田辺の理論（懺悔道）にはあるが、応用（ヴァレリー論）で十分用いられていない契機があるということだ。例えば『懺悔道としての哲学』の中では、懺悔の不断

性と随順性とが、行としての懺悔の成立に不可欠の契機としてしばしば強調されていた(9/20-21, 40-41, 56-57)。そしてヴァレリー論では、ヴァレリーの詩作が、自己の無力を自覚した上でそれでも完璧な純粹詩を追求する不断の過程——田辺の言い方で言えば「遊戯三昧の境地」——であることはおさえられている(13/64-65)。その一方、管見の限り、ヴァレリーの論じる詩作における随順的な契機に関する言及はない。しかし、ヴァレリーの描いた待つ詩人は、ある種の随順的な仕方で自己抛棄しているのみならず、それを何度も繰り返しているとみることもできるのではないだろうか。一言で言えば、その在り方とは言葉という他者への随順としての自己抛棄である。さらに具体的にみていこう。まず、詩人は「見出された詩句」に随順するとみることができる。そうした見方が可能なことは、ヴァレリー本人による自作、そして詩作解説である「『海辺の墓地』について」(1933)の記述によって明確になる。そこでヴァレリーは、「見出された詩句」にあたる「言語的天啓 illuminations verbales」によって、「語と語のある結びつきを突然強制」されるなどした結果、当初の意図から全く逸脱することが時折あったと語っている(Ⅴ, II, 280)。ヴァレリー本人の言い回しを用いれば、詩人は自らではなく「見出された詩句」あるいは「天啓」が示唆する、「存在しようとする何らかの意志 quelle volonté d'existence」に従って詩作することになるのだ(*Ibid.*)。さらに、「作られた詩句」の推敲においても、内容や形式に相応しい語句の生起が偶然に委ねられざるをえないとすれば、詩人の企図や計算といった意識的な試みは、その都度修正や変更を余儀なくされるであろう。こうしてみるとヴァレリーは、自己意識よりも言葉からの示唆やその偶然的な生起にその都度従う詩人の有様を「待つ」という態度として掴むことによって、詩作を不断の随順的な自己抛棄の過程として描き出している、ともいえるのではなかろうか。そして、このように理解して大過ないとすればであるが、田辺の論じる行としての懺悔とヴァレリー本人の描き出す待つ詩作との相違は、少なくとも田辺のヴァレリー論で強調されていた程は大きくないようにも思われてくる。このようにヴァレリー本人の詩学と田辺のヴァレリー論(応用)とを隔てる遠さ(相違)とともに、それと田辺の懺悔道(理論)との近さ(類似)をも指摘したところで、本論を閉じることとする。

お わ り に

最後に、今回の知見から得られる今後の研究への示唆を二点述べて本稿を締めくくろう。まず指摘できるのは、田辺の象徴詩論全般における「恩寵」ないしそれに類する概念の中核性である。例えば、未完の遺稿『哲学と詩と宗教』(1953頃)では、ハイデガーのリルケ解釈を討究するに先立って、パスカルやライプニッツの恩寵理解が集中的に検討される(13/485-497)。さらに遺作『マラルメ覚書』(1962)では、マラルメの「詩作は、まさにプラトンが詩的天才

の特色としたところの、神来の狂気に駆られたものに外ならない」としている（13/204）。勿論、各著作や文脈に応じてその内容は多様であろう。とはいえ、今回ヴァレリー論の検討を通じて明らかになったように、田辺の恩寵概念は、懺悔道としての哲学を背景とすることで、田辺による象徴詩作品や理論の読解を大きく特徴づけるものである。そうであるからには、今後田辺による他の象徴詩論を扱う上でも、その恩寵理解が彼の読解にもたらしている影響に留意することは重要になってくるであろう。

もう一つ述べておきたいのは、田辺の受容を通じて浮かび上がる、京都学派のヴァレリー受容における共通の傾向である。それは、いずれも詩作を巡るヴァレリーの考察をきめ細やかに辿る一方、その偶然性と必然性を成立させる共通の源泉を想定することで、ヴァレリー本人とは異なる思索を展開するに至るということである。論者によってその呼称は様々である——例えば九鬼周造は「現在における感動と直観」、唐木順三は「リズムカルな実在」、竹内勝太郎は「リズム」といった具合である——ものの、それが詩人の内から溢れ出るあるいは外から到来して詩を成立せしめる、宗教性も備えた根源的な詩情として把握されている点は、共通である。そして、彼らのこうした理解の背景には本居宣長の歌論（九鬼）、良寛や西田幾多郎といった禅者の詩（言語）観（唐木・竹内）という、ヴァレリーが引き受けたフランス詩とは異なる詩歌の伝統がある⁸⁾。田辺の場合、宗教と芸術の一致よりも区別を強調する傾向があり、また、他三者が重視する詩の音楽性を低く見積もるといった無視できない相違があるが（13/8-9, 97-98）、彼においてもまた、背景となる宗教思想（懺悔）が詩作における偶然と必然の理解、ひいてはヴァレリーへの接近と分岐両方の源泉となっている⁹⁾。こうしてみると京都学派によるヴァレリー受容の背景には、偶然性と必然性、ひいては詩と宗教とが渾然一体となった抒情的な境地という、彼らの思索に共通のトポスがあるのだと、ひとまず指摘することができよう。

凡 例

『田辺元全集』全15巻（筑摩書房、1963-1964）からの引用はアラビア数字で（巻号/頁）を略記する。なお、旧仮名遣いや旧送り仮名等は現代のものに改めている。

ヴァレリー著作集（リーヴル・ド・ポッシュ版）からの引用箇所は（*Œ*, 巻, 頁）と略記する。（*Œuvres*, édition, présentation et notes de Michel Jarrety, 3 vol., Librairie Générale Française, «La Pochothèque», 2016.）また、カイエ（ファクシミリ版）からの引用については（*C*, 巻, 頁）と略記する。（*Cahiers*, édition intégrale en fac-similé, 29 vol., C. N. R. S., 1957-1961.）翻訳については、筑摩書房版の『ヴァレリー全集』全12巻（1967-1968）、『ヴァレリー全集 カイエ篇』全9巻（1980-1983）、『ヴァレリー集成』全6巻（2011-2012）の既訳を参考の上、拙訳している。

注

- 1) 本稿では竹田篤司と藤田正勝が主唱する、西田幾多郎と田辺元を中心とする「知的ネットワーク」としての京都学派という定義を採用する(竹田 2001: 234-235)(藤田 2018: 340-341)。本定義はあえて思想的特徴に踏み込まないことで、京都学派の哲学における内容や影響関係の多様性、さらには展開までを包括するという利点を持つ。ただ、確かに学派全体に通用する内容的定義は困難かもしれないが、少なくともネットワーク内で広く共有された、もしくは一部であっても興味深い仕方でも論じられた思想・思想家を検討することは、京都学派研究に資するだろう。本稿が田辺のヴァレリー受容を創作論という観点から取り上げるのは、そうすることで京都学派というネットワークにおける思索の広がりや独自性を同時に示しうるように思われたからである。
- 2) 田辺元・唐木順三『田辺元・唐木順三往復書簡』筑摩書房、2004年、214頁。とはいえ、現状では田辺のヴァレリー論は単独で主題的に扱われるケースは比較的少なく、他の著作や思想家とともに論じられることが多い。前者の貴重な研究——付言すれば、両論文ともに田辺のヴァレリー批判に対して、ヴァレリーの詩的言語論を勘案した上で再批判を試みている点も特筆される——として、上原(2014)と杉村(2022)が挙げられる。後者については、まず晩年のマラルメ論を主題にそれとの関連でヴァレリー論も取り扱ったものとして、立花史による諸論考ならびに村井則夫の研究を参照(立花 2016: 312-316)(立花 2021: 149-151)(村井 2021: 91-96)。また、田辺による「社会存在論」としてのヴァレリー詩学解釈を取り上げる論者の多くが、弟子の唐木順三との思想的交流あるいは交錯に着目する点も、興味深い研究動向の一つとして挙げられよう(篠原 2015: 8-13)(田中 2016)(廖 2022)。そして、日本の批評家による1920年代から1950年代のヴァレリー受容——そこでは「近代の超克」という問題意識が受容における重要なファクターとなっている——というより広い文脈の中に、田辺のそれも位置づけたものとして、森本淳生の業績がある(森本 2013: 22-28)。
- 3) 田辺のみどころ「詩学講義 第一講」は、ヴァレリーの「思想の論理的対年代的発展」の最終段階、即ち到達点に位置づけられる。そのため、それについて論じた『ヴァレリーの芸術哲学』の第五章および第六章は、先行研究でも様々な角度から論じられる。以下、今回取り扱わない主要な論点に関する先行研究を挙げる。田辺によるヴァレリーの「作品 *œuvre*」概念の解釈については森本(2013: 26-27)篠原(2015: 5-6)杉村(2022: 83-86)を参照。また、田辺はヴァレリーにおける「行為」と「象徴」とを、後者を彼独自の絶対媒介の弁証法に基づき「有の無化、即、無の有化」という動的な働きと解して一体的に論じるとともに、ヴァレリーにおいてそうした「象徴行為」の適用範囲が社会的ないし宗教的实践を含む「制作」活動一般へと拡張されたとみる。田辺のこうした読解の意義と限界を唐木との比較を介して批判的に論じたのが、田中久文と廖欽彬の研究だといえる(田中 2016: 34-37)(廖 2022: 263-267)。
- 4) 「意味充填」という表現は、田辺の論述にしばしば見受けられる傾向を特徴づけるために、杉村靖彦が用いる表現である(杉村 2022: 75)。この意味充填は一方で、本節と次節とで示すように、田辺の解釈を解釈される当の思想から遠ざけてしまうことも少なくない。他方、本節でみていくように、概念の正確な理解から出発しつつ、そこに留まらずそこから引き出せる思想を展開していくという積極的な側面も、それは備えている。いずれにせよ、田辺の論述の基本的な特徴づけとして、「意味充填」は非常に適切かつ重要な表現と思われる。
- 5) 本箇所における一瞥からも明らかなように、田辺の絶対無概念は非常に多義的である。本稿でこれ以上詳論することは出来ないが、田辺の最初期から晩年までの思索を通観し、田辺の絶対無概念の形成と展開を詳説した浦井(2024)の第一章、また、懺悔道としての哲学における絶対無概念の特徴を明快に示した杉村(2021: 114-115)は、田辺の絶対無概念を理解する上で必読の

文献だといえよう。

- 6) 今回はあてはまらないものの、田辺による象徴詩の翻訳では、原文にない表現が追加されることがままある。こうした田辺の翻訳における「過剰な意味充填」の哲学的含意については、杉村靖彦による解説——ちなみに杉村がそこで取り上げるのは「若きバルク」の訳文である——が参考になる（杉村 2022: 75-79）。また、そうした翻訳を許容する彼の翻訳観に対して加えられた上原麻有子の批判も見逃せない（上原 2014: 91-94）。
- 7) 藤貫（2025: 171-174）では、ヴァレリーによる自作解説である「『海辺の墓地』について」（1933）を参照することで、待つという詩人の在り方をより具体的に説明している。
- 8) 唐木と九鬼のヴァレリー受容については、前述の藤貫（2025）の他、藤貫（2024）も参照。また、竹内の「リトム」概念を核とするヴァレリー受容については、森本（2006）を参照。
- 9) 田辺における宗教と芸術の関係づけ——その主旨は一言で言えば、芸術は宗教への通路としての媒介的意義を有するというものである——については、芸術の固有性や多様性を捉え損なう見方なのではないかとして、高弟西谷啓治の全集解説における問題提起以来、現在に至るまで何度も批判的な目が向けられている（13/657）（杉村 2022: 79-80）（藤田 2025: 222-224）。

参考文献

- 上原麻有子「田辺元の象徴と哲学——ヴァレリーの詩学を超えて」『日本の哲学』第15号、日本哲学史フォーラム、2014年、81-96頁。
- 浦井聡『田辺元 社会的現実と救済の哲学』京都大学学術出版会、2024年。
- 篠原資明「無常と絶対無——田辺元の哲学——」『あいだ/生成』(5)、あいだ哲学会、2015年、1-13頁。
- 杉村靖彦「『哲学を懺悔道として親鸞的に考え直す』——懺悔道としての宗教哲学——」『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』杉村靖彦・田口茂・竹花洋佑編、晃洋書房、2021年、109-124頁。
- 「懺悔道のポエティクスに向けて 田辺元『ヴァレリーの芸術哲学』再読」『東アジアにおける哲学の生成と発展 問文化の視点から』伊藤貴之・河合一樹・蓼欽彬・山村奨編、法政大学出版局、2022年、70-90頁。
- 竹田篤司「下村寅太郎——『精神史』への軌跡」藤田正勝編『京都学派の哲学』昭和堂、2001年、224-239頁。
- 立花史「マラルメ研究史のなかの田辺元——『ヴァレリーの芸術哲学』から『マラルメ覚書』へ」『近代日本とフランス象徴主義』坂巻康司編、水声社、2016年、310-345頁。
- 「田辺元における芸術作品の認知的価値——『マラルメ覚書』と象徴のインフォグラフィクス」『渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム』杉村靖彦・田口茂・竹花洋佑編、晃洋書房、2021年、143-168頁。
- 田中久文「『行為』と『変貌』の美学：田辺元・唐木順三往復書簡を中心に」『日本の哲学』(17)、日本哲学史フォーラム、2016年、32-51頁。
- 田辺元・唐木順三『田辺元・唐木順三往復書簡』筑摩書房、2004年。
- 藤田正勝『日本哲学史』昭和堂、2018年。
- 『評伝 田辺元 私の希求するところは真実の外にはない』京都大学学術出版会、2025年。

- 藤貫裕「九鬼周造の押韻論におけるポール・ヴァレリーと歌論 ——「純粹詩」を手掛かりに ——」
『人文学報』(122), 京都大学人文科学研究所, 2024 年, 535-547 頁。
- 「唐木順三におけるポール・ヴァレリーと漢詩 —— 待つという詩人像を手掛かりに ——」
『人文学報』(123), 京都大学人文科学研究所, 2025 年, 167-181 頁。
- 村井則夫「図式から象徴へ —— 田辺元とパラドクスの哲学」『渦動する象徴 —— 田辺哲学のダイナミズム』杉村靖彦・田口茂・竹花洋佑編, 晃洋書房, 2021 年, 81-106 頁。
- 森本淳生「創造的フランス —— 竹内勝太郎とヴァレリー」『日仏交感の近代 —— 文学・美術・音楽』宇佐美斉編, 京都大学学術出版会, 2006 年, 158-177 頁。
- 「〈ヴァレリー〉の超克 —— 〈ヨーロッパ精神〉と対峙する日本近代批評を映す鏡」『日本学術振興会 科学研究費補助金・基盤研究 (C) 近代日本におけるフランス象徴主義受容に関する総合的研究 中間報告書』第一号, 2013 年, 5-32 頁。
- 寥欽彬「形の論理 唐木順三と田辺元の制作をめぐって」『東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から』伊藤貴之・河合一樹・寥欽彬・山村奨編, 法政大学出版局, 2022 年, 253-273 頁。

要 旨

本稿では、田辺元（1885-1962）とポール・ヴァレリー（Paul Valéry, 1871-1945）の、詩作における偶然性と必然性の連関を巡る見解の異同を明らかにする。ヴァレリーは「詩学講義 第一講」（1938）で、「待つ」という偶然と必然が絡み合う詩人の在り方を論じる。田辺は『ヴァレリーの芸術哲学』でそれを解釈して、詩人は「人事を尽くして天命を待つ」、即ち、詩作で種々の「二律背反」に直面した詩人が、必然としての人事（習練努力）を尽くす一方、自力での完成を諦め、偶然としての天命（恩寵）を「信望」するのだと論じる。しかし、ヴァレリーは『詩と抽象的思考』（1939）の中で、詩人をして傑作を成就せしめる「靈感」（inspiration）は、読者による想像上の拵えに過ぎないとする。ヴァレリーが論じるのは、「天命を受けて人事を尽くしつつ待つ」と表現されうような詩作の過程である。そこでは、偶然「見出された詩句」——それは詩作のきっかけとなるが、断片的で完成図もその道筋も十分には示さない——を天命として引き受けた上で、人事を尽くした（「作られた詩句」の推敲）作品の完成が目指される。しかし、詩人は後半の必然的な（意識的な）過程においても、適切な語句内容の偶然的生起に賭けて、いつ報われるともしれぬ待機を強いられる。両者のこうした相違は、田辺によるヴァレリー読解の背景にある「懺悔道の哲学」に由来する。田辺は、ヴァレリーの論じる詩作が宗教的「行」としての「懺悔」——自己の無力の徹底的自覚を基盤とする自己抛棄（否定）を通じて、「愛」ないし「慈悲」としての絶対者による救済（無即愛の絶対転換）に与かること——に通じるという見通しのもと、ヴァレリーの論述を整理する。そしてその過程で、詩作で生じる困難が待つことで時折解決するというヴァレリーの主張の中に、絶対者（絶対無）による「恩寵」の「信望」という、ヴァレリー本人は言及していない宗教哲学的契機を読み込んだのである。

キーワード：田辺元、ポール・ヴァレリー、待つ、恩寵、懺悔

Summary

This article clarifies the similarities and differences between Tanabe Hajime and Paul Valéry's views on the theme of contingency and necessity in poetic composition. In his 1951 book *The Philosophy of Art in Valéry*, Tanabe interprets Valéry's discussion of the poet's attitude of waiting, as presented in "First Lesson for the Courses of Poetics" (1938). According to Valéry, while poets consciously attempt to find the best combination of words and harmonize meanings with metrical forms, they must also await the contingent advent or occurrence of poetical visions and adequate words. On the other hand, Tanabe argues that while conscious efforts like expanding vocabulary or mastering poetic techniques are undoubtedly necessary for poets, some poetic dilemmas remain. Thus, poets achieve self-affirmation through self-negation, that is, by relinquishing creation under their own power, they wait for the opportunity to receive the contingent inspiration from the Absolute (Absolute Nothingness) and complete the work. This divergence of Tanabe's interpretation from the original arguments of Valéry arose because Tanabe, when interpreting Valéry's poetics, sought to link the artistic practice of poetic composition with his own unique religious practice concept: the notion of "repentance".

Keywords: Tanabe Hajime, Paul Valéry, waiting, inspiration, repentance